

14世紀前半のキプチャク汗国とロシア
——汗国史へのエチュード(2)——

加藤 一郎

**Золотая орда и древняя Русь в первой половине XIV века
— попытка изложения истории Золотой орды (2) —**

Ичиро Като

После смерти хана Тохты (1313 г.) царевич Узбек, который поддерживался городской аристократией, исповедующей мусульманство, захватил власть. Золотая орда при хане Узбеке (1313—1342 гг.) испытала самое блестящее время её истории.

Золотая орда восстановила традиционную русскую политику, ослабленную во времена двоевластия орды (столкновения между Тохтой и Ногаем). Хан Узбек поддерживал Московское княжество, чтобы ослабить Тверское княжество, являющееся одним из сильных княжеств на северо-восточной Руси. Тогда на северо-западе Литовское великое княжество превращалось в могущественное государство и стало угрожать монголам распадом своего господства над Русью. Чтобы препятствовать расширению Литвы, монголы решили воспитать Московское княжество. В результате этого изменения русской политики монголов, Иван Данилович Калита,

получивший титул великого князя Владимирского в 1331 г., поскольку верно выполнял приказание монголов, постольку разрешался укрепить своё княжество.

После смерти хана Узбека (1342 г.) его второй сын Джанибек из трёх сыновей сел на отцовский престол. Но времена хана Джанибека (1342—1357 гг.) явились периодом постепенного упадка могущества Золотой орды. Она прекратилась быть гегемоном Восточной Европы и стала одной из держав Восточной Европы.

ウズベク汗の即位

汗国の再統一に力をつくしたトフタ汗が1313年他界してしまうと、汗国では、汗位をめぐる抗争が発生したが、ここには汗国の社会・経済的な発展が関連していた。すなわち、これまでの汗位をめぐる抗争は、政治的に対立する、たがいに同質的な遊牧モンゴル人貴族層が各陣営に分かれて、汗位継承権をもつ皇子を支持して、争われていたのに対し、ウズベク汗の即位に際しては、汗国の社会・経済的發展をふまえて、たがいに異質な、すなわち都市＝中央集権主義派のモンゴル人貴族層に支持される候補者と、遊牧＝非中央集権主義派のモンゴル人貴族層に支持される候補者とのあいだで争われたのである。宗教的には、前者がイスラム教を、後者が伝統的なシャーマニズムを信仰していた。¹

トフタ汗はその遺言のなかで、息子のイリバスムイシを後継者に指名しており、ステップ遊牧貴族層が、これを支持した。その支持陣営のなかには、かつてノガイに与していたエミールのダズとトゥングスがいた。一方、「イスラム教に帰依しており、主として都市の商業分子とイスラム聖職者層と結びついていた」²モンゴル貴族層は、トフタ汗の弟タグルルの息子、したがってメング・チムールの孫にあたるウズベクを候補者にたてた。都市商業の中心地ホレズムの代官であったエミールのクトルク・チムール、

ホレズムのイスラム聖職層の長イマム・アディン・アリミスカリ、ホレズムの都市上層部と結びついていたウズベクの母バヤルンが、ウズベクの支持派であったというから、ウズベクが都市商業とイスラム教と結びついていたことは明かである。彼らは、イリバスムイシとその支持派を殺害し、ウズベクを汗位につけたのである。

ウズベク汗の治世

30年にわたるウズベク汗の治世（1313～1342）は、キプチャク汗国の最盛期であった。彼はトフタ汗が進めていた汗国の中央集権化を完成した。それまで、ややもすれば離心的な傾向を示していた汗国の諸皇子、エミールたちも彼の権威を十分に認め、諸外国にも彼の威勢は十分に伝わっていた。彼の統治時代の丁度半ば1313年に汗国を訪問した旅行家イブン・バトゥータは、「このスルタン（ウズベク汗・・・引用者）は、広大な王国を所有し、強力で権威があり、偉大な人物であり、高い徳をそなえており、アラーの敵すなわち大コンスタンチノーブルの住民（ビザンツ帝国・・・引用者）の破壊者であり、彼らとの戦争において、熱心な信仰の戦士である。彼の領地は広大で、都市は大きい。その都市にはカフファ、クリム、マジャール、アゾフ、スダク、ホレズム、彼（スルタン）の首都サライが入っている。彼は、世界でもっとも偉大で権威のある七人の君主のうちの一人である³」と記している。また、同時代の中国の地図には、青帳汗国、シャイバンのウルスなど諸ウルスは記されておらず、イルトゥイシュ川とシルダリア川口から西のすべての土地が、ウズベク汗の領地とみなされているという。⁴

汗国の内政を安定させることに成功したウズベク汗は、積極的な対外政策をとったものの、あまり成果をあげることができなかった。

ウズベク汗はバルカン方面に軍事的干渉を行なった。汗国軍は、1319

年にはアドリアノーブルの近くにまで進出しており、また、1312年にはビザンツ帝国とブルガリアとの紛争に介入して、ブルガリアの新皇帝ゲオルギ2世テルテルを支援した。⁵ 汗国とビザンツ帝国とは以前から、バルカン諸国をめぐる政治的対立によってしばしば緊張した関係にあったが、14世紀初頭から小アジアの土地に台頭しつつあったオスマン・トルコの脅威が増大すると、和解へと向った。ビザンツ皇帝アンドロニクス3世（1328～1341）は、自分の娘をウズベク汗に嫁がしている（彼女は、バヤルン・ハトゥンとして知られており、イブン・バトゥータの著作の中にも登場する）。

一方、キプチャク汗国とエジプト・マムルーク朝との同盟関係は、ウズベク汗の治世の当初はかなり友好的であった。マムルーク朝のスルタン・アル・マリク＝アル・ナシールは、汗国の皇女を自分の妃に迎えることをウズベク汗に申しでていたが、かねてからカフカース地方でイル汗国と対立していたウズベク汗は、エジプトとの同盟関係の強化を歓迎し、1320年にはエジプトのスルタンと汗国の皇女トゥルンベイとの結婚が成立した。ところが、両国の関係は、1323年に、パレスチナとシリアへのエジプトの支配権を保証することに基づいて、マムルーク朝とイル汗国との間に平和条約が結ばれてからは冷却していく。イル汗国から脅威をうけなくなったマムルーク朝のスルタンは、イル汗国を共同して攻撃しようというウズベク汗の要請を拒絶した。さらに、スルタンは両国の同盟の象徴であったトゥルンベイと離婚し、自分の臣下に嫁がせてしまった。

ウズベク汗治世下のロシア (1)モスクワとトヴェーリ

イル汗国およびエジプト・マムルーク朝との対外関係が不首尾になればなるほど、ウズベク汗の関心は、東方すなわちルーシおよび東ヨーロッパへと向っていった。当時、北東ルーシ諸公国の中では、モスクワとトヴェー

リが台頭しつつあった。

トフタ汗のあと押しをえて大公位を確保していたトヴェーリ公アンドレイが、1304年7月に死ぬと、トヴェーリ公ミハイールは、大公位とベレヤスラーヴリの領有を求めて汗国に赴いた。アンドレイの兄ドミートリイ、弟ダニーイル、息子のポリースもすでに死んでいたから、ミハイールはアドレイの従兄弟たちの中で最年長、すなわち「ヤロスラーフ・フセーヴォロトヴィチ一族の最年長者」⁶であったから、大公位は当然彼のものになるはずであったからである。

このミハイールに対して、モスクワ公ユーリイも大公位をねらっていた。しかし、「年長制の法則にしたがえば、大公の甥は、自分の父が大公よりも先に死んだ場合には、自動的に大公位の継承者の称号からはずされた」⁷（ユーリイの父ダニーイルは、兄であるアドレイ大公よりも先に死んでいる）から、「どの公が大公位につくのか関心を抱いている誰もが、汗（トフタ汗・・・引用者）は、ミハイールに大公位を認めるであろうことを疑わなかった」⁸という有様であった。さらに、ユーリイは汗国に対する金銭工作の面でも、ミハイールに劣っていた。ミハイールは「金を惜しまなかったのに対して」、ユーリイの方は「もしもっと多くの貢納金を提供すれば、ヤルリイクを得ることができるのだが」と汗国の有力者に忠告されたという。

結局、ミハイールが1305年に汗からウラヂーミル大公位を認められてルーシに戻ってきた。大公ミハイールは、北東ルーシでの支配権を強化すべく、ノーヴゴロト、ベレヤスラーヴリ、モスクワを自分に服従させようとした。

古くからの慣習によって、ノーヴゴロトの公には、ウラヂーミル大公がつくことになっていた。ミハイールは汗国にたつ前に、自分の代官をノーヴゴロトに派遣し、ここを統制しようとしたが、ノーヴゴロトの住民はこ

の代官を追放してしまった。このために、ノーヴゴロトとトヴェーリは戦争状態に入った。この紛争は講和条約をもって終了したのであるが、後述するように、ノーヴゴロトはこれ以降もしばしばトヴェーリに反抗し、その際トヴェーリのライヴァルであるモスクワに肩入れするようになるのである。

ペレヤスラーヴリは、前大公アンドレーイの時代から、トヴェーリやモスクワがその獲得をめざしていた懸案の土地であった。この当時は、モスクワ公ユーリイが支配していたが、ミハイールはここにトヴェーリ軍を送った。しかし、ペレヤスラーヴリの諸公はすでに確固としてモスクワを支持しており、トヴェーリ軍は敗北した。¹⁰

さらに、ミハイールは1304年にモスクワに対して軍を送ったが、それも不首尾に終り、ユーリイと和解して、トヴェーリにひきあげざるをえなかった。

以上のように、大公ミハイールは、ライヴァルであるモスクワ公ユーリイを打倒することに失敗しただけではなく、北東ルーシにおける政治的支配権の確立にも成功せず、困難な状況におかれた。¹¹

一方、モスクワ公ユーリイはむしろ着実に成功を取っていた。すでにユーリイの父ダニーイルは1301年にリャザーンに軍を進めて、リャザーン公コンスタンチン・ロマノヴィチを捕虜としていた。モスクワとリャザーンの紛争の原因は、モスクワがリャザーン公国の町であるコロームナを奪おうとしていたことである。事の非はモスクワにあったのであるが、ユーリイは1306年にコンスタンチンの殺害を命じ、実力でコロームナを奪取してしまった。このようなユーリイ拡張運動を汗国側は支持していたようである。1306年には、タイルの率いる汗国軍が、北東ルーシに出現しているが、それは、ユーリのリャザーンに対する野心を側面から軍事的に支援するものであった。¹²ユーリイの攻撃をうけていたリャザーン公コンスタン

チンの息子ヴァシーリイは、1308年に汗国に赴いて、おそらくはユーリイの無法な行動についてトフタ汗に直訴したものと思われるが、汗はヴァシーリイの訴えを聞きいれるどころか、逆に彼をサライにおいて殺害してしまったし、汗国軍にリャザーンを攻撃させたりしている。汗国は、トヴェーリ公ミハイールに大公位を与えていたものの、ミハイールの勢力がとびぬけて強大になることを阻止するために、モスクワ公ユーリイに肩入れすることで北東ルーシ諸公国のあいだの政治的均衡を保とうとしたのである。

ウズベクが新しいキプチャク汗となると、大公ミハイールは、ヤルリイクを更新するために、汗国に赴いた。当初、ミハイールはウズベク汗の好意を得ていたようである。彼はヤルリイクの更新を認められただけではなく、ノーヴゴロトの反抗を鎮圧するために、汗国軍の援兵を得ており、さらにモスクワ公ユーリイを北東ルーシの政治的舞台から引き離して、汗国に召喚させることに成功しているからである。

ユーリイは、ミハイールが汗国軍の協力を得てノーヴゴロトへの支配権を確立している間、二年間も汗国に留めおかれた。だが、ユーリイはこの機会を利用して、汗国の宮廷にとりいり、ウズベク汗の好意を獲得した。ウズベク汗はユーリイに自分の娘コンチャカをめあわせ、ウラヂミール大公位も与えた。1317年、ユーリイは、カフガディ、アストラヴィルという二人の汗国の使者および汗国軍とともに、北東ルーシに帰還した。

これに対して、ミハイールは、スーズダリ諸公の協力をとりつけて、コストラマーに進撃したが、カフガディからウズベク汗の意向を知らされると、やむやむ、ユーリイに大公位を譲った。キプチャク汗の権威は北東ルーシの諸公たちのあいだで、きわめて高く、ユーリイがウズベク汗を好意を勝ちえていることを知ると、スーズダリ諸公も、ミハイールからユーリイの側に寝がえってしまった¹³。優位な立場にたったユーリイは、モスクワ軍、スーズダリ諸公軍、それにカフガディの汗国軍とともにトヴェーリに進撃

した。カフガディの計画によれば、北西からノーヴゴロト軍が、南からユーリイ軍がトヴェーリに向うというものであった。しかし、ノーヴゴロト軍はユーリイ軍と合流する前に、ミハイールと単独講和を結んでしまったので、1317年12月2日、ユーリイ軍だけが、トヴェーリ郊外のボルテネヴォでトヴェーリ軍と遭遇した。この戦いで、ユーリイ軍は敗北し、彼の妻コンチャカと弟ボリスはミハイールの捕虜となってしまった。

ミハイールは、この戦いで汗国との全面的な対立を回避するために、カフガディの汗国軍との衝突を意識的に避け、カフガディとの交渉に入った。ミハイールは汗国からの使者であるカフガディを丁重に扱い、汗国に対しては敵意を抱いていないことを釈明したようである。一方、カフガディは、汗の承認なくしては大公位につくことはできないこと、ユーリイと和解することを勧告したと推定される。ユーリイに加担していたカフガディは、汗の権威をもって、勝者ミハイールが敗者ユーリイをこれ以上攻撃することを抑止すると同時に、両者にウズベク汗の裁定を求めることを勧めた。

ミハイールとユーリイはこの裁定を求めて汗国に赴いた。ところが、ユーリイとカフガディはミハイールよりも早く到着して、ウズベク汗に反ミハイール工作を行っていた。このために、あとからやってきたミハイールは、汗の裁定を求めるところか、汗国への貢納金を支払わなかった点、汗国の使者カフガディに反抗した点、ユーリイの妻でありウズベク汗の妹であったコンチャカを殺害した点の3つの罪状で糾弾されてしまった。ミハイールは、逐一反論したものの、すでにユーリイとカフガディの工作が効を奏しており、彼は死刑の判決を下され、1318年に、処刑されてしまった。¹⁴

ミハイールの処刑で終る14世紀初頭の北東ルーシにおける紛争の経緯は、以下のことを明かにしている。まず、北東ルーシの諸公は、単に軍事的・経済的に強力になっただけでは、ウラヂミール大公として、他の諸公

に対して政治的支配権を行使することはできなかった。トヴェーリ公ミハイールは、明かにユーリイをはじめとする他の諸公よりも軍事的に優勢であったにもかかわらず、汗の支持を得ることができずに失脚してしまった。汗の支持を得るには、第1に、汗の意志の忠実な執行者となること、第2に、金銭その他の物質的な手段を使って、汗とその周辺の役人にとりいることが必要であった。しかし、汗国および汗は、単に自分たちの「お気に入り」をウラヂミール大公位につけたわけではない。最後には処刑されてしまったミハイールも、当初はトフタ汗、ウズベク汗の好意をえていたのである。問題は、このミハイールが北東ルーシの諸公の中であまりにも強くなりすぎたことにあった。「分割して統治せよ」という原則にもとづいてロシアを支配していた汗国は、北東ルーシ諸公国の中のいずれか一国が強力になって、従来の「分領制的な分裂」という意味での「政治的均衡」を破壊し、ひいては統一したロシアが出現してくることを危慮していたのである。だから、ミハイールが、抵抗に遭遇したとはいえノーヴゴロトをある程度掌握し、スーズダリの諸公から大公として承認されると、汗国はモスクワ公ユーリイの側に加担して、軍事的交渉を行ない（カフガディの派遣）、この干渉さえも失敗すると（ボルテネヴォの戦い）、ミハイールの殺害という非常手段にうったえたのである。つまり、ミハイールの罪状は、先の三点ではなく、「彼が強くなりすぎた」ことにあったわけである。さらに、ミハイールが西方の強国リトヴァと結びつこうとしていたことも、汗国がミハイールの忠誠を疑うのに十分な材料であった。後述するように、リトヴァの台頭は、汗国とロシアの関係、汗国の対ロシア政策に重大な影響を及ぼすのである。

ミハイールの処刑後、当初緊張していたモスクワとトヴェーリの関係は、次第に和解へと向った。1319年には、ロストーフ主教プロホルの仲介で和解が成立し、翌年にはミハイールの三男コンスタンチンがユーリイの娘

ソフィアと結婚している。

だが、モスクワ、トヴェーリ両公国の和解は、分割統治を原則とする汗国にとっては、好ましい事態ではなかったようである。ウズベク汗は両公国を意識的に対立させようとし、1321年には、ガヤンチャル率いる汗国軍をトヴェーリ公国の町カシンに派遣した。このガヤンチャルの任務はカシンを攻撃することだけではなく、ユーリイにトヴェーリへの進撃を命じることでもあったというから¹⁵、ウズベク汗の意図は、和解していた両公国を再度敵対させようとしたことにあったわけである。ユーリイ軍とトヴェーリのドミートリイ（ミハイールの長男）の軍は衝突しそうになったが、戦闘にまではいたらず、ドミートリイは大公位への野心を示さないこと、カシンあるいはトヴェーリから汗国への貢納金として2000銀ルーブリをユーリイに渡すことという条件で和解した。

ユーリイはドミートリイと和解すると、汗国への貢納金である2000銀ルーブリを汗国に手渡そうとするのではなくノヴゴロトに向い、ここに長期間滞在した。¹⁶トヴェーリ公ドミートリイは、この機会を利用して、汗国に赴き、ウズベク汗に貢納金の着服の件などでユーリイのことを中傷し、大公位を獲得した。一方ユーリイも、1325年に汗国を訪れたが、ドミートリイによって殺害されてしまった。この行為が、汗の承認のもとになされたのか、それとも汗の暗黙の同意があったのかは判然としていないが、当のドミートリイも汗の承認のもとに処刑された。

ドミートリイの処刑後、大公位は、彼の弟アレクサードルの手に渡った。だが、ウズベク汗が再度トヴェーリ公に大公位を認めたのは、策略を使ってトヴェーリ公国を破壊するためであった。ウズベク汗は、トヴェーリ公に大公位を与えたにもかかわらず、トヴェーリ市に対して挑発的な態度をとり、チョルハン（ジェルカンあるいはシェフカル）率いる汗国軍を、トヴェーリに派遣したのである。チョルハンの汗国軍は、トヴェーリ市を

占領し、トヴェーリ市民を虐待した。この虐待は、「占領軍¹⁷に対して許しがたい攻撃が行なわれるまで、住民を意識的に挑発すること」であった。はたして、トヴェーリ市民はこの挑発にのり、チョンハンと、ヴォルガ・ブルガール地方からやってきた商人を殺害した。1327年のトヴェーリ反乱である。

ウズベク汗治世下のロシア (2) イヴァーン・カリターの登場

このトヴェーリ反乱に際して、北東ルーシの政治の舞台に華々しく登場してきたのがイヴァーン・ダニロヴィチ（カリター）であった。彼は、兄ユーリーの死後モスクワ公国を相続しており、ライヴァルであるトヴェーリの反乱という好機をとらえて、早速汗国に赴いた。そして、5人の万户長の率いる強力な汗国軍とともにルーシに帰還し、トヴェーリ、カシン、トルジョークなどを懲罰したのである。トヴェーリ公かつウラヂミール大公であったアレクサンドルは、ノーヴゴロト、のちにはプスコフに逃亡した。その弟コンスタンチンとヴァシーレイもラードガに身をかくした。こうして、このトヴェーリ反乱を契機として、トヴェーリのミハイール一族は、北東ルーシの政治の舞台から追放されたのである。

多くの年代記は、イヴァーン・カリターが大公位についた年代を、トヴェーリ反乱の翌年の1328年としている。イヴァーン自身も、汗国軍とともに率先してトヴェーリ反乱を鎮圧したわけであるから、すぐさま自分がアレクサンドルにかわって大公位につくことができると期待していたことであろう。だが、イヴァーンの大公位就任問題についてはより正確に叙述していると思われる『コミシオンヌイ・スピーソク』は、「ウズベクは二人のあいだで公国を分割した。すなわち、イヴァーン・ダニロヴィチ公には、ノーヴゴロトとコストラマー、公国の半分、スーズダリ公アレクサンドル・ヴァシリエヴィチには、ウラヂミールとヴォールガ川中流域を与えた」

と記している。¹⁸

統一のセンターとなる可能性をもつ強力な公が北東ルーシに登場することを防止するという従来の汗国の対ロシア政策を考えれば、ウズベク汗が、トヴェーリのミハイール一族が政治生命を失ったあとすぐに、モスクワ公イヴァーンに肩入れしたとは考えられない。汗は、トヴェーリ没落後最強者であるモスクワの対抗馬として、スーズダリ公アレクサーンドルに着目したのである。この結果、1318年から1331年の3年間、ウラヂミール大公国は、スーズダリ公アレクサーンドルとモスクワ公イヴァーンのあいだで分割された。前者が、首都ウラヂーミルを含む大公国の東部、後者が、大公国の北部と西部への支配権を与えられた。

だがこの時代に、汗国の対ロシア政策は転換を余儀なくされた。13世紀初頭にミンダウカス（ミンドフク）の下で国家的統一を達成したりトヴァが、14世紀前半のゲディミナス（ゲヂミン）の時代に、東ヨーロッパの大国に成長して、汗国の属領たるロシア方面に影響力を拡大しはじめてきたからである。たとえば、1325年頃、ゲディミナスの遠征によって、キーエフから汗国の勢力は追放され、彼の弟フォードルがキーエフの代官となっている。¹⁹このリトヴァの台頭という脅威に直面して、汗国がとった政策は、モスクワ公イヴァーンにてこ入れして、リトヴァ膨脹を阻止することであった。すなわち、汗国の対ロシア政策は、単に北東ルーシ諸国の動きからだけではなく、東ヨーロッパ全体の政治的力関係を考慮して立案されなくてはならなくなったのである。²⁰

こうした汗国の対ロシア政策の転換を反映して、1331年に大公アレクサンサーンドルが死ぬとすぐに汗国を訪れたイヴァーン・カリターは、すんなりと大公位を手に入れた。イヴァーンは、汗国への貢納金を納め、対外的には汗国に従属し、リトヴァと対抗しているかぎり、内政面では、モスクワ公国を強化したとしても、かつてのような汗国からの軍事的干渉にあ

うことはなくなった。年代記が、「このときから40年間、全ルーシの国土²¹に平安が訪れ、タタール人がルーシの国土を略奪することは止んだ」と記しているのは、このことを指している。

イヴァーン・カリターが、リトヴァの膨脹に対する汗国の先兵として行動した事例の一つに、1339年のスモレーンスク侵攻がある。

13世紀には独立したスモレーンスク公国として成立していたスモレーンスクは、その交易ルートの大半がリトヴァを通過していることから判るように、地理的にも、商業関係の意味においてもリトヴァの影響を被らざるをえなかった。1340年にスモレーンスクがドイツ人と結んだ条約の中で、スモレーンスク公イヴァーン・アレクサンドロヴィチはリトヴァ大公ゲディミナスのことを「私の兄」と呼んでいる。²²（15世紀には、スモレーンスクはリトヴァ大公国の構成に入る）。

1333年、汗国軍とブリャーンスク公ドミートリイの軍が、スモレーンスクに侵攻しているが、これは、ロシアへの膨脹をはかるリトヴァ大公ゲディミナスに対する汗国の警告であったと思われる。²⁴

ウズベク汗は、1339年に冬に再度スモレーンスク侵攻を企てた。彼は、使者トヴルビを派遣して、イヴァーン・カリターをはじめとして、モスクワ、リャザーン、スーズダリ、ロストーフ、ユリエーフの諸公にスモレーンスク攻撃を命じた。ニコン年代記には、「イヴァーン・コロトボルが、トヴルビその他のタタール人とともにやってきた。大公イヴァーン・ダニロヴィチは、ツァーリ（ウズベク汗・・・引用者）の命令にしたがって、彼らとともに自分の軍ならびに自分の軍指令官アレクサンドル・イヴァノーフ、フォードル・オキノヴィチをスモレーンスクに派遣した。また、以下の諸公も、タタール軍とともに、ツァーリの命令にしたがって、スモレーンスクに向った。スーズダリ公コンスタンチン・ヴァシリエヴィチ、ロストーフ公コンスタンチン・ポリソヴィチ、ユリエーフ公イヴァーン・

ヤロスラヴィチ・²⁵とある。「ツァーリの命令にしたがって」というように、ウズベク汗の命令によって、きわめて大規模なルーシ諸公軍が動員されたわけである。

このように、イヴァーン・カリターは外交面では、リトヴァに対する汗国の先兵として使用されたのであるが、内政面では、汗の意志の忠実なる執行者であり、汗国への貢納金を確実に納めているかぎり、かなりの自由を享受することができた。これに対応して、汗国のロシア統治政策にも変化が生じた。貢税の徴収と軍の徴募を任務としており、ルーシ各地の主要都市に逗留していたバスカク制度は廃止され、汗国内で執務をとるダルーガが、ルーシの統治を担当し、問題が生じた場合には、汗の使者としてボソールがルーシ諸公に派遣されたのである。²⁶

ウズベク汗死後の後継者争いとジャニベク汗の即位

キプチャク汗国の最強の汗の一人ウズベク汗は1342年に他界した。彼には三人の息子がいたが、後継汗位をめぐる、二人の息子ティニベクとジャニベクが対立した。エジプト側の史料は、ティニベクが宮廷内の陰謀によって殺害されたとしており、²⁷ペルシア側の史料は、ティニベクとジャニベクとのあいだで戦闘が行なわれて、前者が敗北したとしている。²⁸さらに、エジプト側の史料によると、この二人の抗争には、モンゴル人貴族層上層部（エミール）の動きが、密接に関係していた。彼らは、キプチャク汗国の国家制度が整備・強化されていくにしたがって、国家行政の重要部門を担当する、有力な官僚層に成長していた。史料に「このスルタン・ウズベクは自分の国の事業のうち、その本質に関心を向け、ことの詳細にはたち入らない。そして、報告されたことに満足し、税収と歳出について明細を知ろうとはしない」²⁹（エロマーリ）とあるように、汗の背後に、多くの行政官僚が成長してきていることがうかがえる。キプチャク汗国の汗位

につくには、まず彼らの支持が必要だったのであり、彼の支持を得て汗位についたジャーニベク汗は、まず彼らの意向を尊重しなくてはならなかった。³⁰

アゼルバイジャン侵攻

ペルシアのイル汗国は、第7代ガザン汗の治世に、その黄金時代を迎えた。だが、第9代アブ・サイド汗が1335年に没し、イル汗国の宗主フラグの家系が断絶すると、諸勢力が分立・抗争するようになり、汗国の国勢は急速に弱まっていった。ジャーニベク汗の時代に、イラクの権力を握っていたのは、僭主メリク・アシレフであったが、「メレク・アシレフの領土では、彼の無法なふるまいが頂点に達していたとき、人々は母国をみすてはじめた」³¹(ハムダッラ・カズヴィニ)とあるように、国内はかなり混乱していた。

こうしたイラクの混乱をみて、ジャーニベク汗は、キプチャク汗国の積年の課題であったカフカース地方における汗国支配の再興に着手しようとした。ジャーニベク汗は、約30万の大軍を率いて、1357年春、テレク川を越えて、アゼルバイジャン地方に侵入した。メリク・アシレフは緒戦で敗北し、捕虜となって処刑された。ジャーニベク汗は、アゼルバイジャン地方の征服に成功したが、メリク・アシレフに「予はフラグのウルス(イル汗国・・・引用者)を征服するために行く」³²と述べているように、イル汗国全体を征服する意図をもっていた。しかし、この当時汗国において、ペストが流行していたために、征服地の支配権を息子のベルヂベクに譲り、突然帰国していった。

このアゼルバイジャン侵攻によって、アゼルバイジャン地方はキプチャク汗国の版図に入ったが、「君主ジャーニベクとベルヂベクが去ったことを知ると、アヒジユクは多く群衆とともにタブリースにやってきて(そこに)定住した。アシレフ派の大半は彼の周囲に集った」³³(ハムダッラ・カズヴィ

ニ)とあるように、汗国のアゼルバイジャン支配は短期間のものであった。また、征服事業を中断させたペストは、中国がインドからキャラバン交易ルートにそって、まずホレズム地方に侵入してきたものであり1346年には、クリミアを襲って、85,000名の死者をだした。この14世紀中頃のペストの大流行は、キプチャク汗国を内部から弱体化させていった。

汗国の地位の低下

すでにウズベク汗の時代に、大公ゲディミナスの下で東ヨーロッパの強力に成長していたリトヴァは、ジャニベク汗の時代には、汗国にとって、ますます脅威となっていた。リトヴァは、ロシアや東ヨーロッパの反汗国派のセンターとなり、ポーランドやハンガリーと同盟して、汗国のロシア支配を直接に脅かすようになった。また、ポーランド王カジミェシ3世は、ジャニベク汗がクリミアのヴェネツィア人、ジェノヴァ人との紛争によって困難な状況におちいていたのを利用して、南西ルーシに進出し、1349年には、ベルス、プレスチェフ、ウラヂーミル・ヴォルインスクを占領した。³⁴

このように、ジャニベク汗治世下のキプチャク汗国は、もはや、パトゥ、ベルケ、トフタ、ウズベクの各汗の時代のような、東ヨーロッパに君臨する威勢は失いつつあった。かつて、パトゥの大軍に席捲された東ヨーロッパ諸国は、いまだ本格的ではないとしても、汗国に対して攻撃的姿勢をとるようになってきていた。つまり、東ヨーロッパの国際政治の舞台では、汗国は、もはや覇者ではなく、リトヴァやポーランドなどとならば、1つの強国にすぎなくなったのである。こうした、汗国の位置の低下をさらに促進したのが、ジャニベク汗死後の大混乱時代であった。(続く)³⁵

注

- (1) この件に関して、フォードロフ・ダヴィードフは「ノガイの支持者であるダズとトゥングスがウズベク反対陣営（イリバスムイシ支持派・・・引用者）に参加していることから判断すると、この反対陣営は、ウズベク個人に反対しただけではなく、キプチャク汗国の発展の新しい傾向にも反対したのである。彼らは、ウズベクが権力につくことによつてこの傾向に強いはずみがつくと考えたのである。ダズとトゥングスのグループは、明かに、遊牧貴族層が定住住民と接近すること、汗国がイスラム化し中央集権化することに反対した」と指摘している。

Г. Федоров-Давыдов, Общественный строй золотой орды, М., 1973, стр. 104.

- (2) М. Сафаргалиев, Распад золотой орды, Саранск, 1960, стр. 65.
(3) В. Тизенгаузен, Сборник материалов, относящихся к истории золотой орды, том I, извлечения из сочинений арабских, СПб., 1884 (Тизенгаузен I), стр. 290.

また、シュプラーは、ウズベク時代の汗国の隆盛をとらえて、「もし、ウズベクが自国民にキリスト教の採択の決定をしたとするならば、ロシアでの彼の一族は栄え、統一した東ヨーロッパの大国の王冠は彼の一族のものとなり、リューリクの後継者のものとはならなかったと想像できるかもしれない」との歴史上の仮説を披歴している。

В. Spuler, *Die Goldene Horde*, Leipzig, 1943, S. 87.

- (4) М. Сафаргалиев, указ соч., стр. 65.
(5) В. Spuler, S. 92.
(6) А. Экзенплярский, Великие и удельные князья северной Руси в татарский период, с 1236 пр 1505 г., том I, СПб., 1889, стр. 58.

- (7) J. Fennel, *The Emergence of Moscow 1304-1359*, Berkeley and Los Angeles, 1968, p. 60.
- (8) А. Экзенплярский, указ соч., стр. 60.
- (9) там же, стр. 61.
- (10) エグゼンプリャールスキイによると、このペレヤスラーヴリをめぐる戦闘はこうである。「ユーリイのもう一人の弟イヴァーン・ダニロヴィチは、当時モスクワにいたが、ある人物を介して内密に、トヴェーリ勢が不意にペレヤスラーヴリを占領しようとしていることを知った。イヴァーン・ダニロヴィチは、モスクワとペレヤスラーヴリの軍とともに、自分のポヤールたちとペレヤスラーヴリ勢を（十字架宣誓によって）固めたのちに、すばやく防衛の準備に着手した。両軍はペレヤスラーヴリ近郊で遭遇し、激戦が起った。そして、トヴェーリ勢は完全に撃破された。」 там же, стр. 60 — 61.
- (11) フェネルは、ミハイールがおかれていた困難な状況をこう説明している。「ミハイールは、モスクワのユーリイとの紛争にあたって、ウラヂミール大公位のヤルリイクを手に入れることによって、最初のポイントをあげたにもかかわらず、北東ルーシに帰還したとき、きわめて大きな問題に直面していること、困難が予想されていることに気がついた。彼が直面していたのは、モスクワの敵意、ペレヤスラーヴリの服従拒否、公然とした敵意ではないとしてもノーヴゴロトのそっけなさであった。・・・トヴェーリ公国は別として、ミハイールが確保していたのは、ウラヂミール、コストラマー地方、ニージニノーヴゴロトだけであった。そして、コストラマー市とニージニノーヴゴロト市においてさえも、前大公の家臣たちに向られた民衆蜂起と見えるような事態に対処しなくてはならなかった。」 J. Fennel, op.cit., p.64
- (12) *ibid.*

- (13) エグゼンプリャールスキイは、この間の事情をこう記している。「ミハイールの側にはスーズダリ諸公が加担していたが、それは恐らく、ユーリイが汗と親戚関係を結んだことを知らなかったためか、ユーリイがミハイールとの戦闘に勝利を収めることを疑ったためであった。両軍は長いあいだむかいあっていた。ミハイールはカフガディと連絡をとり、もちろんこの結果、ユーリイがどのような立場にいるか知ることができた。ミハイールはユーリイのために大公位をしりぞき、トヴェーリに帰還して、今度はユーリイの侵攻を予想して（この点では彼は誤っていなかった）、（先年焼失してしまっていた）大クレムリンを建設した。ユーリイはコロムナに留まり、トヴェーリ攻撃のための軍を集めた。スーズダリ諸公は今度は、モスクワ公の方に力があることを知ると、ユーリイの側に加担した。」 A. Экзенплярский, указ. соч., стр. 64.
- (14) J. Fennel, *op.cit.*, pp.83-87.
- (15) *ibid.*, p.93.
- (16) このノーヴゴロト滞在がユーリイの失脚の原因となるのであるが、この件について、ナソーフは、ユーリイには汗国にそむこうという意図はまったくなく、たまたまノーヴゴロト人に招待されたからそこに滞在したと解釈している。これに対してチェレブニンは、ユーリイが「汗国から税金をかくしてしまおうとする意図的な願望をもっており」、ユーリイはノーヴゴロトに依拠して、汗国への政治的従属から解放されようとしていたと解釈している。だが、このチェレブニンの解釈は説得的でない。ユーリイは緊急の用事でノーヴゴロトに出かけたのであり、なによりもミハイールの処刑を目のあたりにしてきたユーリイが、そんなに軽率に汗国に対して反抗的な態度をとるはずがないと思われるからである。A. Насонов, *Монголы и Русь*, М., 1940, стр. 90. Л. Черепнин, *Образование Русского центра-*

лизованного государства в XIV-XV вв., М., 1960, стр. 474.

(17) J. Fennel, op.cit., p.109.

(18) А. Насонов, указ. соч., стр. 96.

チェレプニンは、この事件に関して、「ウラジーミル大公国領をロシア諸公に分割するという行為によって、汗国政府は、汗国に対抗できるようになるほどの財政的手段と軍事力が、諸公のうちの誰か一人に集中してしまうことを防ごうとした」と述べている。Л. Черепнин, указ. соч., стр. 498.

(19) История Литовской ССР, Вильнюс, 1978, стр. 41.

(20) フェネルは、汗国の対ロシア政策の転換について「汗は、当分の間、フセーヴォロトヴィチ家の間の力の均衡を調整することに関連する問題をたなあげにして、スーズダリの諸問題というローカルな分野から、国際政治に展開しようとした」と記している。J. Fennel, op.cit., p.146.

(21) А. Экзенплярский, указ. соч., стр. 74

(22) J. Fennel, op.cit., p.171.

(23) 年代記には、「その年の冬、ブリャーンスク公ドミートリイの軍が、タタール人カラнтаイ、チリチ、多くの軍司令官たちともにスモレーンスクにやってきて、イヴァーン（スモレーンスク公・・・引用者）と講和を結んだ」とある。

(24) J. Fennel, op.cit., p.172.

(25) А. Пресняков, Образование великорусского государства, Пг., 1918, стр. 146.

(26) ハルペリンは、汗国のロシア統治制度の変化についてこう説明している。「14世紀にステップで新しい政治情勢が生まれたために、当然

のことながら、モンゴルのロシア統治制度は再編されざるをえなかった。ロシア諸公国の監督という責任は、バスカクの手からダルーガと呼ばれたロシアに在住していない役人の手に移った。ダルーガなる用語は、・・・13世紀には、ペルシア語のシフナとトルコ語のバスカクと同義語であった。・・・14世紀になると、ダルーガなる用語は、モンゴル人およびその様々な隷属民のあいだで、バスカクなる用語にとってかわり、はっきりとバスカクと同じ意味をあらわさなくなった。この変化は、遠方から統治する制度（したがってより安上りであった）への移行に伴って生じた。・・・各ダルーガは個々のロシア諸公国を担当していた。バスカクがイギリスの植民地総督に似ていたとすれば、ダルーガはアメリカ国務省の各地域担当役人に似ていた。・・・ボソールは重要な役職であり、多分モンゴル人貴族であったであろう。彼らは、帝国の駅伝制度（ヤム）を利用して移動し、おそらくは、官庁の印章（金、銀、その他の材料からつくられているパイザなる印章）を携行していた。・・・モンゴル人の使者は、バスカクがしたのと同様に、貢税と軍隊を集め、モンゴル人の指令や決定をロシア諸公に伝え、彼らをサライに召喚した。この使者は、モンゴル人がロシアを支配していた時代の大半を通じて、諸公国とキプチャク汗国をつなぐ大きな輪であった。C. Halperin, *Russia and the Golden Horde*, Bloomington, 1985, pp.39-40.

- ②7 「742年（1341年6月17日～1342年6月5日）、ベルケの国の支配者である君主ウズベクは、チャガタイ汗国を征服・領有するために、長男ティニベクを大軍とともに派遣した。ティニベクはそこにでかけたが、そのあいだに君主ウズベクは死に襲われた。彼はこの年のシェヴヴェル（1342年3月10日～4月7日）に新サライで死んだ。彼には、ティニベクの他にジャニベクとヒドルベクという二人の息子がい

た。エミールたちは、ティニベクが自分たちを統治しにあらわれるまでは、次男のジャニベクを（一時的）に（自分たちの上）にすえることに同意した。エミールたちは、このようにジャニベクの汗としてたてた。ティニベクはこの年に、父の死を知ると、統治するためにすぐさま帰還してきた。ところがティニベクが自分の都市に近づいてくると、ジャニベクは母と相談しはじめ、彼女に、『今、私を王国から追放するために、私の兄がやってきている』と話した。二人は血のつながった兄弟であったが、母は（誰よりも）ジャニベクを愛していた。彼女はティニベクのことについて、エミールたちと相談をした。ティニベクが都市に近づくと、エミールたちは彼に会いにでかけ、彼の手に接吻するために集った。そして、ティニベクが彼らの前にきたとき、彼をうちすえて殺した。そして、エミールたちはティニベクの弟ジャニベクのところに戻って、（事件のことを）彼に知らせた。次にジャニベクは、末弟ヒドルベクにもいいがかりをつけて、殺し、国家を単一の君主として支配するようになった・・・（エンメリク・エンナシル）Тизенгаузені, стр. 263.

- 29 「743年（1342年4月6日～1343年5月25日）、ウズベク汗が死んだ。（彼の）後継者にはティニベクがなったが、彼には二人の弟ジャニベクとヒドルベクがいた。ジャニベクは（自分の兄）ティニベクに対して反乱を起し、二人のあいだで合戦が起った。ここで、ティニベクは敗北し、捕虜となった。ジャニベクは彼を処刑し、父の汗位についた。ついで、彼はヒドルベクも殺害し、743年（1342年4月6日～1343年5月25日）に、君主の地位を手に入れた。」（シェイフ・ウヴェイス）В. Тизенгаузен, Сборник материалов, относящихся к истории золотой орды, том, II, извлечения из персидских сочинении, М., 1941 (Тизенгаузен II). стр. 101.

- ㉙ Тизенгаузен I, стр. 230.
- ㉚ サファルガリエフは、「キプチャク汗国の封建貴族層は、宮廷内の抗争において、ジャニベクの側に肩入れした。幼年時代からウズベクの後継者として養育され、十分に国勢に通暁していたティニベクは、自分たちの権力の強化を志向するエミールたちにとっては、受けいれがたい候補者であり、その一方、彼らが推挙したジャニベクは、非合法に汗位についたのであり、エミールたちの命令にしたがって行動しなくてはならず、まったく彼らに依存したからである。」
M. Сафаргалиев, указ. соч., стр. 103.
- ㉛ Тизенгаузен II, стр. 94.
- ㉜ там же, стр. 102.
- ㉝ там же, стр. 97.
- ㉞ M. Сажаргалиев, указ. соч., стр. 105.
- ㉟ 本稿は「13世紀後半のキプチャク汗国とロシア」(『文教大学教育学部紀要第一九集』)の続編にあたる。